WASON
HQ
1104
J74+

THE WOMAN'S MAGAZINE

女學雜誌

明治二十年十月二十二日刊行

Oct. 22
1887
no. 8

每土曜日發兌
一冊正價五錢
府內無郵送稅

第八十一號

東京 女學雜誌社

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

No. 81. October 22nd, 1887.

第八十一號

EDITORIAL:—Complaint to the Girl Students.

LEADING ARTICLES:—Marriage Customs in Old Japan, by T. Satō; The Physical Education of Women must be Changed to Improve our Nation, by Y. Saneyoshi.

MISCELLANIES:—Etiquette between Man and Wife; My Tour during the Vacation, by H. Suzuki (Concluded); Costive State in Pregnancy.

BIOGRAPHIES:—Murasaki Shikibu.

NOVEL:—"Fragrant Rose": No. XIV.

CORRESPONDENCES.

GENERAL NEWS.

ADVERTISEMENTS.

●社説　女生徒への苦情

●論説　日本古代夫婦のありさま（佐藤定助）
人種を改良せんとには婦人の躰育を必要とす（實吉安純）

●叢話　夫婦間の禮儀○鹽原入浴の記（鈴木弘恭）○產婦の泌結

●佳傳　紫式部

●小説　薔薇の香第十四回（月の舍しのぶ）

●寄書　慈善の婦人（司馬こう）文苑（鈴木弘恭撰）

●新報　十二件

●廣告

●珊瑚の珠　（第四十回）

○リットン曰く汝ち婦人よ汝ちは平常たゞ一塊の可死躰なり然るに事あるに臨んでは乍ち膨脹して彼の天の使の如くなるとよ

○ワシントンイルゼン曰く母の愛は深ひ哉吾等が種々のコヽロミにあひ種々の苦しみに會するときも母は尚ほ常に吾等の傍に在り吾等誤まつて罪を侵すとき母ハ之を怒るよりも寧ろ悲しんで之を非難し而も其心中より吾等をハなたず吾等が其の子なるとを忘れたまハず

○バイロン曰く吾れ婦人の泣くを見たり大なる涙青き眼の上にかゝる其さま恰かもスミレ露を荷へるが如し

○エヂソン曰く女子に尊むところのものは其美麗なるにあらずして其程好きと、其罪なきと、其の德の潔白なるとにある

○さて衣類もなくおれが十三の時手作りの花染の帷子一つあるより外はなく一つの帷子を十七の年迄で着たによつてすねが出てなんぎにあつた切めてすねのかくれるほどの帷子一つほしやと思ふた此のよふに昔は物事不自由なとでおじやつた（おあん物語）

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

ジョアン、デ、アーク孃の像

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌第八十一號

明治廿年十月廿二日

●社説

○女學生徒への苦情

夜は既に更けたり徐むろに茶を煎じて獨り一杯を傾むけ机に倚て靜かに默考すれば秋風自から起つて梢に聲あり虫韻草叢の間だに鳴つて鈴を振るが如し、此時萬感こも〴〵生じ來ると雖ども志想未だ定まらず偶ま傍はらに置いたる投書二つ三つを開らひて之を閲するとき端なく一老女某の名を以て寄せたる文章を見るに至れり。讀去るに其辭は固より粗野、其調はもとより朴訥言ふところ亦た大抵當今の時勢に通ぜざるの誤に出づる所多しとは思はれたれども密かに顧みるに現に今ま如此き苦情を默々言はざるの胸中に藏さめ陰に當今の女學生に對して不平を寄するもの固より少かるまじと相考へたれば則ち其文章の中ち言辭の畧ぼ解するに足る部分をのみ抄出して左に掲載し今ま學びの船に打乘つて急流激波を翼一文字に乘り超へ前後を顧みず餘人の言葉を聞かず勇氣勃々として日夜文學の河海を押し渡らるゝ女學生諸君に示し諸君が日に三たび省み玉ふ折の一助とも爲さばやと欲せり而して文中所々に括弧を附して間だに多少の評言を加へたるは之を或は諸君の爲に辨じ或は之を此の老女を慰さむるが爲めに述べたり要するに以て此の文章に對する吾人の意見を表したるものなるが故に併せ記して之を本號の社説に代ゆると云爾。

先生樣は兼ねて女供に學文をさせて男にも負けないやうにさせたいとて嚴い御骨折の事と承りまして眞に申すも効ないかとは思はれましたが一と先づ申上て置たいと存じて蚯蚓なりの文字に思を寫し聞こえ上げ〱私に一人の孫娘御座候今年は早や十八にも成り人並よりは少と大きい方と思はれ候が去年の春ごろ東京から近所の書生さんがお歸りになつて此頃は何でも女に學文をさせねば成らぬ之からは女の世であるから一日も昔のやうにさせて置ては成らぬと色々お話しに爲りましたから私事此の娘の兩親も早死いたし老母の手一つにて育てたるとゆへ夫れゆへ時勢に後れさせて勉强も致させざりしと人さまに申さるゝが口惜しく思ひまして去年の夏から東京へ連れて參り○○の女學校へ入れて學文させました所ろ何分田舍そだちの上に手一つにて甘やかして敎へましたとゆへ人樣の中へ出るとを大層恥かしがり日々學校へ參るとも餘程苦に病みました程で眞に

内側すぎると叱りもしたる程でありましたがまだ十日も立たぬうちに餘程慣れました勢か其よりは朝もまち兼ねて學校へ行くように成りました眞に喜ばしいこと存じて居りまするうち半月ほど立ちまするこ一人二人ほどづゝお友達が私宅へ時々來られまするように相成ました私も甚だ悦ばしく存じまして鄭寧におあしらいを致しまするこ私の顔を見なさるときはチャンと座はつてお話しも成さいまするが伏間を建てゝ此方より樣子を考へまするこ直さま横なりに長くお成りなされて寢ながらお話などを成さる樣子私方平生質素を旨といたし升とゆへ此樣な折も燒芋か豌豆よりはお茶受にとて出し申さず然るに此の燒芋や豌豆を大層お好きなされて寢ながら之をお食りなさり茶を飲んでは食べ食べてはお話しを爲さります扨て其のお話しは何か西洋の事が多く御座りまして頓と分りませぬ所が澤山ありましたが時々承たまはり候にはあの先生はどうである此の先生はこうであると何か師匠さまの惡口より私は何よ好だ其よりも何の方がおいしいなど卑しげなる事のみ多きよう思はれあゝ嗚呼かゝるお友達と交りを願ひましてはと存じましたが左らばとて外にどう致しまして宜しきとやら一向に承知いたし

ませぬとゆへ或日學校に參り取締の方にお目にかゝり段々と孫娘の事を願ひどうか行儀のよく成りまするようお頼み申しましたる所ろそれは一層塾にお入れなすつた方が宜しからう此處では朝晩に善い教へがありまする先生方や西洋の教師方もお住まひの事ゆへ自然善い風儀をお見習ひにも成りませうと信切のお話しゆへ丁度秋の初めより其學校の塾へ願ひました所ろ其後は七日に一度歸りましたり二週りに一度ちよつと歸りましたり致して段々と私宅へ參るとは少なうなりましたが今年の夏休には一と月餘り宅へ歸り朝夕久しぶりで住ひましたとゆへだん/\其行儀を見まするとまことに/\驚き入るとばかり何ぜまあ此の樣に成りましたかと淚のこぼるゝ斗りで御座ります一躰夜は早う寢まするこ躰の爲めにも爲り亦私孫娘のように介弱いものは是非早う寢かせよと國元を出まするときもお醫者さまがくれ/\も仰しやいましたのに娘は夜る早く寢まするこを大層きらひましてまだ中々之から勉强を爲ねば成りませんと云つてどうしても寢ません之も勉强の爲めと思つて内心では少し喜びもいたしましたがなか/\之は口斗りで机にラムプを大層明るくして置き何か考へるような風を爲て横に

遠慮なく寢ますると筆をもつたまゝ大きなイビキを爲て假寢を致します私も偶と目をさまして毎度此の有樣を見まするから一度は少と腹を立てゝ起しましたら頬をふくらかして横柄な言ば附で聞かれぬようなとを申します夜分が之で御座いますから朝は大抵十時ごろまで寢て居まして朝御膳と晝とは大抵一度で御座ります私の申しまするにお前も學校に居たら料理などの事も覺へられませんから此のお休で歸つて居る中ちに少と煮燒料理の事でも覺へてはと申しますと苟くも學文をする女生徒がそんなとを仕なくても筆より重いものを持たずに立派に暮されると口返答をして聽きません御膳を食べまするにも足を少し側の方へ出して横なりに座はり大きな音をさせて急いで食べまして膳を其儘に突出して置て直さま寢ころんで新聞を讀ますから之は餘り行儀が惡るひ第一古から御膳をたべて直に寢ると牛になるとも云ふて大層躰に惡るいと申しましたら大きに笑らひまして食事后はこう長く寢ころんで血の運動をゆるやかにすればコナレが宜しひ折には少し眠る方が何ほ宜しひなど申して其儘眠るともありました又お友だちが參られまするを何んですか手を握りましたり肩に抱きつく計りで少こしもお辭儀などの樣子は見へず其のシャベりまするとは去年私方にて話しました時の次第では御座いませんそうこう致して何か大層面白そうに高聲を揚げて歌をうたひましたがガヤ〳〵申し乍ら其儘連立つてだまつて外へ出て參ります私も心配ながら送つて出て見まするとそのお友達の下駄は互ひに一尺ほども離れて脱いであり今ひとりの方のは一つがヒックリ反つて居ります何か笑ひぞよめき肩を打つたりなどして挨拶もそこ〳〵に遊びに參りましたが夜は十時前に成つてやうやく歸りました娘子がそう遲くまで獨りで外へ參りましてはと言ひかけますと早や口を尖らしまして親母さんは兎角交際と云ふとを何んとも思ひなさらんから困ります人間は何事よりも附合が大切で當今は餘程六かしひ世の中ですから夜遲くまでお附合で遊ぶともありますと云つて大層にをこります私は今時の事には存じませんが之では何分心配に思はれます（御尤もの儀と愚考します）また娘の着物の事で御座りますが何ゆへか着方を大層をかしく致しまして歩るく度に脛が見へますから夫では餘まりと申しますと今時の女はそんなヅベ〳〵した風は出來ませんと云つて頭ごなしに叱ります（叱るとはちと嚴しひです）着物の裁

ち縫の事を少しも致しませんから女がそれでは後ちにどういたしませうと申すと夫れは仕立屋に頼めば宜しひと云つて頓着しません(之は當今の常弊で實に困るとです)切めて洗濯でも致すかと思ひますると袷も綿入もアカの附きましたまゝで能くたゝみもせず其儘なり單物までボロ同樣其上申すもはづかしきとは下の腰帶すら自分で洗うとを存じませず女のたしなみと云ふとを少しも搆ひません(實に驚き入るとである)宅へ歸つて居りまするうちに親類の所へ連れて參りました所ろ碌々時節からの挨拶も出來ず一と通りの世辭も存じません何ぜあのようにシャベル口がこのやうに利かぬかと驚く程で御坐いました(之は書生の常さほどお責なさるな)あの親類はこう〳〵云ふ家柄で私宅とは淺からぬ因緣ゆへ云々と申しましても一向に感じませず其ような昔し風の事は當世には構はないとと云ひます(親類附合は矢張り大切になさるが宜しひ)お朋友と書狀の取やりが大層はげしひようす之も一つは喜ばしひとは存じますれども時々男の方と往復いたしまして反つて之を當世風だと申しまするが一躰西洋にては此樣の事を構ひませぬものにや眞に氣づかはしきとに候(我國にてはかゝるとまで餘り自由にするは宜しからず)平生男女同權とか何とかしきりに申しまして男の方を何とも思はぬほどしきりに議論いたしますが此頃の先生方の御議論は女供に左樣に勢ひを與へて下さるものに候やさき〳〵の處ろはなはだ心配と存じ候(矢張女は溫和にして貞操なれと敎ゆるとに候)西洋の書物は多少讀めるように成りましたと存じ候へども先達て田舍のお醫者樣へ送る時候見舞の手紙を書いて與れと申しました時一と通りの文脉をも辨まへませず困り入候(當今の女生徒方の此弊は困却の事に候)日本の學文も隨分稽古いたすように候へども作文は何やら男めきて新聞のやうに思はれ候が女の玉章にも矢張此ようなるが宜しく候や(消息文は矢張り溫和しき方よろし)何分行儀作法前とこと〳〵く變はり万事あら〳〵しく少しも女らしくなく何ぞと申せば口答へして優しき所ろ御座なく何事もやりはなしにて取しまりなく學文を人さまに鼻にかけ稍ともすれば議論めきしと申すなど何分心配にたへず候あいだ一應先生樣へ申上げ何如にいたしましたらバ宜しかるべきや御敎を仰ぎたく云々めでたくかしく

吾人通讀して玆に至る虫の音唧々として沸湯の響に和す

● 論說

○日本古代夫婦のありさま

佐藤定助

頃日少々女子風俗に關し候事相調べ候處偶々小中村清矩氏と談話の末もし相應の記事有之候ハヽ貴社雜誌へ相投じくれ候樣との義に付きことに拙き筆にて御投送いたし候も紅顏の至には候へども自今閑にまかせをり〳〵草稿御送附可申上候云々

學士會院編纂囑托　佐藤定助

洋の東西に論なく、南北を隔てし邦にもあれ、未開の時代にありては百般の事その制あることなく、從て結婚の事なども、其儀式あることなきは、こと新しくいふまでもなし、或ハ一夫にして、衆婦を帶するあり、或は衆夫にして、一婦を共有するもあり、其猥褻非禮今日より是を見れば、殆どいふに堪へざるものあり、されど草昧の世にありては、かゝる風俗を怪しまざるこそ道理なれ、日本古昔のあらはしとても、大抵各國草昧の時代とおなじくして、復いふべきものなきに似たれど、自國の事なれば、其一般をかゝくるも、敢て徒勞の業にはあらざるべければ、今其ありさまのあらましを擧て、讀者の評を請はん。

我古史に據て、夫たり妻たるもの、そのはじめ如何ありけんと考ふるに、もとより未開時代の事なれば、其間を周旋する、媒介者やうのものあることなく、又其父母の認許を得るにもあらず、能く之を評すれば、自由結婚にして、あしざまに云へば野合なり、男子其婦人を娶らんとする時は、まづ深夜に其婦の許を訪ひ、極めて秘密を旨とし、互によく其意中を探り、いよ〳〵深く親しみし後に、男子之をその父母に告げ、許諾を得て、始めて其事を公にせしものゝ如し、此時に一の儀式やうの事あらば、婦たるもの幷に其父たるものより、禮物とて種々の物品を、夫たるものに贈るの風習是なり、其他更に式あるを見ず、斯男子は自由を恣にして、已が心のまゝに撰びし者あれば、一夫一婦にして、同等の權力を與へしものかと云に、決してさにはあらず、男尊女卑の弊風は、未開時代の名物と見えて、やはり我古代にも、其風習の行はれしこそ是非もなき次第なれ、近來出板の女權沿革史とかいへる書には、日本古代の風俗には、男女其權を同じくして、男尊女卑の弊習なきとなし、その之あるは、儒佛渡來以後のならはしなりと、痛論せられたり、吾人もかく論じたきは、萬々なれども、其事實の掩ふべからざる者あるを奈何せん、何を以て是をいふと云ふに、婦人ハ其夫に對して、貞節の義務を守らざるを得られざれども、夫ハ何時にても、其妻を離縁することを得べく、又妻に對して、守らざ

るを得ざるの義務あるとなし、かく云ひしのみにては、放誕にわたるの恐あれば、くだ〲しけれども、今その一例を徴せんに、大國主神の妻、嘗て其夫に告げし歌にいはく、

我が大國主こそは、男にいませば、打見る、島のさぎ〱、搔見る、いそのさぎ〱、おちず、若草（冠辭なり）の妻もたせらめ、我はもよ、女にしあれば、汝をきて、男はなし、汝をきて、夫はなし、云々。

此の歌を以て見るも、男子は至る處、婦人を撰みて、衆婦を帶するも妨なく、婦人は貞節を守りて、他の男子を見ることを得ざるは明けし、男子は衆婦を見ることを得、婦人は夫に對して、守らざるを得ざる義務あるは、抑々何ぞや、吾人は斷じて、男女其權力を均ふせざるの結果なりと、評せざるを得ざるなり。

又今日にありては、猥褻として見ることを厭ひ、醜惡として聞くことを忌む、風俗も古代にありては、普く國中に行はれ、屢々異父姉妹、異母姉妹、繼母或は伯叔母を妻とすることあり、その甚しきに至りては、一時に二三人の姉妹を妻とすることありき、蓋し此類の風俗の中只神代の傳説にのみ載せて、絶えて其後に見えず、最も早く廢棄せられたる事もありき、されど敏達用明の二帝等も、其庶妹を召し給ひし例あれば、異父姉妹、異母姉妹を娶ることは、當時も尚怪しまざりけん、もとより我國には、族外婚姻の制（本族中にて女を娶るを禁ずるの制）などはあらざれば、男子たるもの其妻を撰ぶにあたりて、別に制度の妨ぐるものあらざりしは、今更いふまでもなし、

古代風俗の中に、吾人をして喜悦せしむるものあり、更に大に喜悦せしむるものあり、夫婦暫く別れんとする時に、互に下紐を結び交はせる風俗是なり、是れ萬葉集などにも、多く見えたる事にて、中世までも此の風習ありしとこそ覺ゆれ、遙かに之を見れば、一笑に附し去るべき如くなれども、素樸の時代にありて、かゝる習慣は、風教を維持するに、又案外なる勢力を有するものなり、是吾人が輕々看過せずして、大に喜悦を表する所以なり、其他夫婦の間に關して、子ありて後に、其妻を離縁する時は、如何に處置せしや、事蹟の古史に見えたるものなければ、今知るに由なし、又養子の事は、支那の風俗より移り來りしものならん、何となれば漢籍渡來以前たえて此事なければなり。

右に述べたるは、古來夫婦の間の事の、僅に一斑に過ぎず、又混雜せんことを恐れて、一々例證を徴せず、讀者幸におもひのどめ給へ。

○人種を改良せんには婦人の躰育を必要とす

實吉安純　演説
若林玵藏　筆記

人種を改良するにハ婦人の躰育が必要であります今人間が病氣をして得のゆくとハない身躰が弱いとか病人があれバ當人が苦しみ近所の者も迷惑いたします然ういふ者が國に澤山あれバ國が貧乏しますそれで病氣をしない樣にするにハ普段の攝生も勿論でありますが親の身躰が健康で有て其子でなければ生れながらにして薄弱の子が出來ます中々攝生をしても發育が出來ず何か營業し樣と思ても出來ない哀れな者になります夫で生れてから後ハ無論の話ですが其父母となる人の身躰が健くなければ其子孫が壯健な質に生れ附くとハ六かしい男子の方も必要でありますが健康な子孫を設けるにハ第一に婦人の身躰が壯健でなければいけないといふのハ婦人ハ男子と違て子供を育てるに乳を呑せるからどうしても子供を健康にするにハ母親が壯健でなければならんといふのハ誠に肝要なとであります。

日本人ハ西洋人と比べれバ身躰も少さいし智力もなし力も無いといふとハ愛國心のある者ハ嘆息します何ぜ西洋人と比較して日本人ハ身躰の育ちが惡るいかと段々研究すれバ必ずしも人種に因るので無くして或ハ婚姻法杯が不充分の爲めに躰格が衰ろへたのでありませう昔ハ日本人が大きかつたといふが夫ハ本統であるかどうか知りませんが日本人と西洋人と比べて見れバ日本人ハ小さい然うして今に何ふしても西洋人と併び立て國を防ぎ護るといふにハ身躰が健くなければなりません身躰を健くするにハ人間の種子迄入替へなければならんといふ説がありますがそれハ全く間違であります決して西洋人が日本に來て日本人と交つて子供を拵らへた所が好く育つ譯にハいかない牛や馬ならバ歐羅巴から種子を輸入するとが出來ませうが人間の婚姻をするにハ婚姻の法に適ハなければなりません他の動物と一緒でハありません日本人と西洋人の間に出來た子供ハ非常に活潑であるかといふに一向に好くない故にアラビヤ馬の種子を持て來て日本の種と一緒にして雜種を拵らへる樣にハいかない好しやられるとした處が中々出來難い事で國の違つた婚姻をするにハ其國の法律に從がハなければなりません通例の人にハ出來ない望む可らざるとであります然うして日本の愛國心から言ても餘所の人を頼んで來て日本の人種を好くしなくも日本に在る人種で父母となる人の攝生を子供の內から好くして其人が子を育てる樣になれば

健康な子供が生れるに違ひなからうと思ひますそれで西洋人と比べると日本人は弱くつて小さくつて西洋人と肩を並へるとは出來ないといふ夫も一方から見れば惜しかな說ではありません日本でも日本中の人間を悉く調れば三千七百万人でありまして其内五六百万人は薄弱でありませうが其他の三千万人は健康であります即ち田舍の農業をする人は可なり壯健であります家の內に入て學問をするとか何をするとか充分に運動をしない身躰の方を使はないで精神丈けを使ふ人即ち中等以上の人は身躰が弱いといふのでありますそれは昔は士は擊劍とか何とかいふ者が有て運動をすることが多かつたが段々太平に爲て然ういふ人は袴肩衣を着けて勤めをする樣になり格別の勞働をせずに數百年歷來り今でも士族や中等以上の町人はいつでも安樂にして躰力を使はないから弱わくなります如何に滋養物を食べても消化しなければ滋養にならない然ういふことからして數百年の間田舍の百姓や何かは身躰が壯健であるが中等以上になれば弱くなる日本でいふ大名の樣な人は士族よりも倘一層身躰の弱いことが甚しい華族抔は顏付を見ても直ぐ分る位で其位は貴し金はあるが身躰から見れば哀れな有樣であるのですといふのは永い間勞働なしで暮して居たからであります夫を回復して中等以上の人も百性と同樣に勞働に堪へて身躰を健康にするには鍬を持つといふことは出來ませんが學校には躰操もあり又夫々身躰の運動の法があるのです。

それで滋養物の方も其通りで身躰を勞働する人であれば麁食を澤山しても消化が善いから能く効きます安逸にして居る人は假令善い物を食ても消化の惡るい爲めに薄弱になるのであります中等以上の人は百性の樣に勞働は出來ませんから百性の樣にして居ては身躰が續きません麁食をしても勞働をすれば滋養になるのであります併し中等以上の人は學問もしなければならず家業もあるが散步するとか運動をするとかして食物も幾らか滋養になる物を食はなければなりません滋養の物と言ても別段選ふには及ひません一日一度は肉、一度は魚を食してそれが能く消化すれば滋養になります唯食て寐たりでは養いになりません。

婦人は將來母親になる人ですから其人の身躰が壯健でなければ子孫が壯健になれません故に別して御婦人方は小さい內から身躰を活潑にして置かなければなりません健康の身躰で發育が好くて子供を育てれば其次の時代即ち只今の小學年齡と

か十二三歳の子供が發育して二十歳前後に爲て出來た子供は半代經てもいくらか弱くなります夫で順を逐てこれから三代五代と經つ内には隨分外國の種子を以て來なくつても日本の人種で日本の國を守る壯健な者が出來るに相違ないと思ひます身躰を健康に保つのは當人一人の爲めのみならず一家の爲め一國の爲めそれのみならず吾か子孫に影響を及す者であります。

衞生の話は外の話の樣に面白くありませんがお聞流しに爲ては何んにもなりませんから成る丈けお聞に爲たとは覺えて置いて御實施になる樣に致度と思ひます。

"*My children know nothing they do not understand.*"

Whately.

●叢話

○夫婦間の禮儀

古語に禮は和を尊としと申す即はち禮儀禮式の極意は雙方お互ひに相ひ親睦して共に和樂きはまりなきの地に至りて初めて其目的を達したるを云ふ然るに凡そ禮法の儀式と云へるものは大抵甚だ面倒くさきものにて何れも多少は外を飾るようの趣あり先づ人を訪ふときは斯々すべし人と談話するときは云々すべしと規則を設くるときは既に幾分か窮屈の思ひを起さすることにて彼の和樂を專一とする目的には相應せざるかの如く思はるゝ所もあるなり、然し之は只だ其一つを見て未だ其二を見ざるの誤り必竟未だ至らざるの考と云ふべし。抑も人は誰しも僻のなきものはあらず無くてすら七癖はありと古人は觀じたり左れば人々もし其の有の儘を打ち出して勝手氣儘の言行を爲し之れが即はち飾らざる所の眞率の風なりと申さんには何如なる温和しき人なりとも之を見て嫌らうと必せり既に之を嫌らつて相ひ離れたしと思ふ所の情を發こさば最早之と共に親睦和樂するとは得て爲すべからざるなり、是故に人々互ひに幾分か其氣儘を制し多少其の勝手を抑さへ程よく地金を飾つて一身を引〆ざれば末永き附き合は出來ざるものなり左れば禮儀禮式と云つて無用の束縛を爲し爲めに少なからざる窮屈を感ずると愚らしきようにはあれども苟くも相ひ破れざるの和樂を爲さんとには是非とも此の儀式なぞては相成るまじ故に禮の用は和を尊しとし必竟和を得んとを目的として色々の規則をは設くる者也。

此故に餘り嚴密に流れて雙方の心持を自由に現はさしめざる如き禮式は既に禮の主旨を誤まりたり又た人々互ひに相ひ和

樂して秘くし立てなき交際を爲さんと欲して少しも禮儀あるものに頓着せざる如きこれ亦た禮の用を辨ぜざるの誤に陥りたり、苟くも久しく仲よく爲さんと思はゞ先づ禮を守るべし禮を行つて親しく睦まんと欲せば餘り嚴密の儀式を用ゆべからず右二つの關はり合ひは其間髪を容れざる程の心得違ひに由て左右に莫大の相違を生じ來るべき也。

左れば夫婦間の禮儀にも先づ此の道理を辨じて終始程よく儀式を履行するを大切とす、万葉集に

　樂しみは夕顔棚の下涼み爺はてゝらに妻はふたのして

とあり之は亭主腰までの着物をはをり女房湯もじ一つをして夕顔のかげ涼しき下に團扇遣ひしながら談し合ふを無上の樂しみとしたるとあり成程之はお互ひに遠慮會釋せず眞底をさらげ出しての交じらひなれば此上なき愉快ならんとは思はるれども然し此を愉快とも感じまた無上の樂しみとも感ずるは必竟雙方に非常の愛情あるが故にてわざ〳〵短衣ゆもじになりたればこそ初めて其の樂しみあるなれあらず此の夫婦或ひは新づまにして未だ物珍らしきうちなれば斯る奥底なき仕打にて倘ほ不都合なきようにも見ゆるならんが既に雙方幾年か相交じはり折々は氣に逆らう事をも仕合ひ多少は面白からず思へる事も陰につもりつもつたる曉には斯る無禮不義の取なしにてお互ひに愛想を盡かし頓に嫌氣を生じて不和の基ひを固むると必定なり彼の若嫁が最初は身のたしなみに注意して折々の薄化粧に花を笑はすの模様を示し或は愧ぢ或は顔を赤めて玆に言ひがきた迷はしの力を凝むるとあるが既に子一人二人を擧けたる比ほひは胸をさらげ出し帯じまりを緩るくし髪を亂し齒をはがし眉毛ぼう〳〵と生ひ伸び何の頓着もなく何の用捨もなく寢てはイビキを鳴らし起ては不調資の面を現はしたらんに何如に形風を以て妻を愛せざる良人の心中にも知らず識らず不快の念を起させ遂に家内和樂の爲めに宜しからざる決果をも生ずるに至るべし此れ實際の事にて世間に此を證すべき例はあれだ多きとは今更らに申すまでもなからん左れば彼の夕顔棚の下すゞみ夫婦無遠慮にして毫も禮儀に頓着せざる如きは決して吾々の手本とすべき者にあらざる也。

但し之に反して亦た徒らに夫婦間の禮儀を嚴にしては相成らず起つにも小笠原流の心得を要し座はるにも松岡流の覺悟を專一とし取るにも置くにも一々西洋のエチケテに從ふと申すに至らば一家内は小學校の女禮式場と爲つて到底眞の和樂は得られまじきあり、事の有無は知らず荀子又は韓詩外傳等に

見ゆるに

むかし孟子外より歸來りし時夫人迎接の禮を缺きたる事あり無禮を數めて去らんと有しを孟母敎へられしは外より歸り來るには必らず履を鳴らし聲を揚げ豫じめ人に知らしめざれば卒暴に家人の罪を爲すとありとあり

此の敎に據れば良人外より歸るとき先づザワリ〳〵ギシ〳〵エヘン〳〵と申し置いて室を入る、細君此音をきゝつけて其處は端近かいざ御通りあれと迎接す、斯て夫婦間の禮を得たりと申す而して之を爲さゞれば致方なく去るとも不都合はなしと云ふまことに驚き入つたる事には候はずや顧みるに今日世上多くの夫は特更に六かしき顏を爲て嚴めしき風附を示し細君を叱りつくる如くきめ附けて初めて夫たる威嚴を保ち得たりと思ひ妻は何事にも唯々と隨がひ氣兼苦勞をして思ふ事を口にも言はず寧ろ之を他人に打明かして夫の心を相談する如き双方まことに心得違ひの甚はだしきものあり畢竟ずるに之は餘り嚴肅を主旨として徒らに片くるしき禮儀を守り遂に和を尊としとするの本意を誤まりたるもの也」之を以て夫婦間の禮儀は彼に走らず此に流れずよく其中を採つて程よく双方の氣儘を制御し万事相應の儀式に注意して終始その規則を履み行はゞ親睦和樂きはまりなかるべしと思はる。

○塩原入浴の記

鈴木弘恭

十四日空のけはひ昨日の如し」

十五日けふも福渡戸にものしてさて家にかへらんとてたちいづ」あるじ家のものどもみなかどにおくりいでゝこんとしもまたかならずまちたてまつらんなどいふいとねもごろなり車はやくてたちまちにふくわたにつきぬいづみや某といふにやどりてゆあみなどしてうちくつろぐ今日はいとあつし日のかたぶきたる比すこしすゞしうなりにたればおはしまによりつゝ見いだせばとほき山はうちかすむやうにてうはしらけたるにちかきもなにとなうさやかならぬは夕ぐれ近くなりたるなるべしうすくこくしげれる木どもの中にかれたるが一本ばかりぬけいでゝたてるに何鳥にかあらんかなたに四つ五つこなたに二つ三つとまりたるいねにきたれるにや吹風すらしづまりて木草さへねふれるが如くなるに水のおとのみ目さめつるやうに高うきこゆるはそゞろ身にしむやうなれば

「さびしさハ浦のとまやのたぐひかはみ山のさとの秋の夕ぐれとかいつけて筆をおくほどにいつのまにか霧のふかく立こめにけん山はみなながらかきけすやうにきえうせて空とひとつ

色になりにたればいとほいなしと思ふをりからやどの家刀自がはしたものをよびてともしびとくまゐらせよといふこゑふとうしろのかたにきこゆ。

十六日またきのふの如しけふ一日とゞまりて岩の湯冷の湯淡の湯などいふに入浴すいづれも箒川の河原にある温泉なれど岩の湯はかなたのきしなればいはゞしをつたへ柴橋をわたりなどしてゆくにけはしききり岸のもとにありていとけしきよし夕つかたなる神とゞろき雨いみしうふる土人のものかたりに塩原のゆふだつあめはかならず雷のおときこゆればすなはち雨ふるとぞ山里なればなるべし。

十七日空のけはひなほきのふの如しとくおき出て入浴などしてあさけたうべぬれば車もてきたれりでうどもとりしたゝめてやどりをいでんとするにあるじらいできていとゐやゝかにわかれごとをいふさてもときし道をかへるなればべちにかいつくべきふしもあらねど關谷までのあひだは高きよりひきゝに下るなれば車のはやきこといはんかたなし關谷より那須にいたる道のほどはれいの那須の原なればくさぐさの花なほさかりなり

ふけぬれどなほ八千草のさかりにて秋もおくあるなすのしの原といひはてぬに那須のうまやにつきて車よりおりて川島やといふにいこふ此のうまやは大田原より一里ばかり西北にありこたび停車場のまうけあるによりて人家もいできにけるなり次の矢板永久保などいふうまやもおなじ今朝塩原を出しは六時ばかりなるにまだ八時すぎなりしばしありて汽車にのりこみぬこはけさ郡山をいでゝきたれる汽車なりさて宇都宮につきけるは十時ばかりなれどれいのわりごやうのものうりひさげばかひてたうべつ小山にいたりてふとうち見れば停車場の標札にをやまとかけりこもさきのゐしばしのたぐひなればをやまとあらまほし利根川の橋をわたるほどに川下をみればいにしへの栗橋の舟わたり場なるべし今も棹さしてわたる舟二つばかり見ゆ久喜蓮田などいふうまやも近きころまうけたるなりとぞ大宮にて前橋にゆく汽車にあひ赤羽にて郡山にゆく汽車にあひぬ赤羽は王子と川口の橋とのあひだにある停車場にてこのころまうけたるなり此所よりは新橋横濱などにかよふ汽車もあり一時三十分といふに上野に着けば家より車ひきゝたりてありこはきのふの郵便につけてしらせおきつればありけり家にかへればめこどもいとうれしげなるさましていでむかへつかばかりたよりよきみよなれば旅といへどい

と心やすきをさても立出るきはにはわかれをしげにみえていまかへりきたればいとうれしげなるは人のまでゝろなりや」ましていにしへは百里あまりの道としいへば今のあめりかにゆくよりも遠しと思ふめれば歌にも文にもそのわかれををしみつゝいとかなしきさまにのみいはれしはことわりなれど今より後なほ人のさとりのやう〳〵にひらけゆかましかば是よりもまたいかなるたよりよき事かいてきなましさては後の今を見ることなほ今のいにしへをみるが如きことなしともいはざらめやはと思ひやられてうれしさのあまりにやくなきことをさへかくなむ。

○姙婦の泌結

姙婦は泌結しやすきものにて通じの少きと往々あるとあり然るに此際は尋常の通じ藥を用ひては宜しからず成るべく温和ある下劑を用ひねば成らぬとなり故にカロメル及び水銀を混じたるいろ〳〵の下劑の類は決して服すべからず必らず其害あるべし彼の蓖麻子油サラッド油（サラッド油とは加物などにかくるチリーブ油のとあり）大黄丸、蜂蜜、蒸したる梅、無花果、葡萄、燒きたる林檎、燒きたる梨子、コッフヒー、麥麵包と糖蜜の如き凡そ下劑の効能ありて而も其力の甚だ軟らかなる類を服用すべし

此中にもヒマシ油は特に姙婦の泌結したるに用ひて宜ろし但し之を服するに一時に多く用ひんよりは度々少しづゝ用ゆるを善しとす其量は即はち一度に匕一杯ほどに限り朝早く之を服すべきなり

但しヒマシ油は余程飲み惡くきものなれば之を嫌ふ人多けれども之は全く其の服し方を承知なきゆへなり蓋し之を服するにはコップを清水の中に全く浸して其内側のグルりを悉く能く潤ほし置き扨て此の內に能き加減に淸水を容れ而して服すべき丈けのヒマシ油を此の眞中に滴らし決してグルりに附かざるやうに爲して之を飲むにありさらば油の氣決して口中につかず快ちよく飲まるべし。次の法は温めたる牛乳の上に油を落して飲むに在り。其次の法はコッフヒーの上に落すにあり尤もコッフヒーの上に落すときは最初コッフヒーに砂糖乳などを入れ置て直に飲まるゝやうすべし此の法は余程都合よきとにて一つには消化の爲にあり又コッフヒーの助けにて下劑の効もあるべし。其次の法は蜜柑類の汁に之を落すにあり。最後の法は酒類の中に之を落して飲むとあれども斯すれば飲みたるのちに酒と油と多少

Digitized by Google　　Original from CORNELL UNIVERSITY

溶解し合ひて嫌なる臭ほひをチクビに出し不快あらんゆへに此法は宜しからず。

"I do not see you as human beings at all: I only see you as immortal Souls".
Miss Fletcher.

●佳傳

○紫式部のはおし

式部の夫は右衛門權佐藤原宣孝といへる長保三年四月廿五日宣孝卒せられし後再び他に嫁せず身を堅く持ちて後ち上東門院に仕へ奉れり此門院の女房達はみな歷々たる才女どもなりしが其中にて此式部は才智ある貌もちもせず甚だおとなしき人なりけれど學問は格別にすくれて出來たり其證は寛治四年に上東門院まだ中宮と申奉りし時式部に白氏文集の樂府をおらはせたまひし事あり其比門院の御父御堂關白道長公式部が夫に別れて後やもめながらに宮仕へするに容儀うるはしく才智ある女なる故たひ／＼たはふれ言あどのたまひけれど品よくもておおして御心にまたがふおとなかりしさやうの事どもは彼式部の日記にてうかゝひしらるらん寛弘六年の比式部の作られし源氏物語門院の御前にありけるを道長が御覽ありと例の御たはふれことありしついでに梅の折枝に敷きてありし紙に御歌をかゝせたまへり

すきものと名にしたてれば見る人のおらで過るはあらじと
そ思ふ

此心は梅は味の酸きものなるを好きものとかよはせて紫式部源氏物語を作りて色好みといふ名にたちてあれは見る人か梅を手折るごとく式部を其まゝに見すおす事は有まじとおもふとたはふれたまひしゝさて此返歌を式部のよまれたるは

人にまたおられぬものを誰れの此すきものそとはくちおら
しけん

これはさやうに仰せらるれど夫より外の人にはまた手折られぬものをたれか色このみなりと申ふらしさふらふぞといふことおり扨てまた其比式部渡殿いねられし夜戸をたゝく人有りと聞て居られたれどおそろしさにをともせすして夜を明かされたるに其明る朝道長公よりつかはされし歌

よもすからくひ那よりけるなく／＼ぞまきの板戸をたゝき
わひつる

くひ那よりけるとはくひなよりまさるほどにといふ事ゝ此かへしに式部

たゝならしとはかりたゝくくひ那故あけては如何にくやし

からまし

かやうに身を堅く持ちてみさほの正しき人にてまことに才德兼備りたる女と云ふは此紫式部なるべし扨て紫式部と云ふ名のことは藤原爲時のむすめなりし故はしめは藤式部といひしを源氏物語を作られし時紫の上の事をすくれておもしろくもあわれにもかゝれし故彼上東門院の御殿にて藤式部と云ふ呼名をあらためて紫式部と號せられたるなり又一條院源氏物語を叡覽ありて御稱美の上式部は日本紀をよく暗んしたるもの也と仰せられしより左衞門の内侍と云ふ官女か式部を日本紀の御局と申たるよし也式部の父爲時は藤原時鄕の弟子にて名高き學者にして歌をもよくよまれし故式部も幼少の時より學問のこゝろざし有て兄の惟規史記をよまれし時も傍より見覺へてよくよまれたりそれ故父の爲時申されけるは此むすめ男子にてあらましかは生長の後和漢の舊記にも渉り朝廷の故實にも通ずべきに女にてはいなしなとつぶやかれしとぞ式部寡になられし後も夫宣孝の殘しおかれし書籍どもを見てのみ月日を過されし故かたはらの女どもか婦人の御身にてかやうに學問を好ませたまふ故不幸にて早くやもめにならせられたるなるへしなどひそかにそしりたり又箏をよく彈かれたるにや千載集上東門院に侍りける時里にいでたりける頃女房のせうそくのついてに箏傳へにまうてんといひてはへりければつかわしけると云ふことかき有て式部の歌に

　露しげきよもきかもとのむしの音をおほろけにてや人のたつねん

とありこれを見ても彼女房に箏ををしへられたることのしらるゝ也又日記の中に箏のこと和琴しらべなから心にいれて雨のふる日琴を倒せなともいひ侍べらぬまゝになとかゝれたり扨源氏物語を作られたる事は長保三年に夫信孝に別れられてより後三四五年はかりやもめすみして居られし時のことなるへし無名抄の說に村上帝の御むすめ大齋院より上東門院へめつらしき物語のさふらはゝ見せさせ玉へと請ひにつかはされし時門院式部を召してつくらせられたるよしいへり又其ほかさま〳〵の趣意をたてゝ論づれどいづれもおほつかなき說ども也扨又石山の觀音に祈請して須磨明石の兩卷よりかきはじめたりともいひ大般若經の料紙を本尊に申うけてかきたりなどいふ說ともに名高き古人達のいひ傳たる事なれど用ひられぬ說々也又源氏物語を好色の書の樣におもふは僻事なり式部は前にも云やうに才德そなはりたる人なれば種々樣々の世間

にありたる事どもをとりあつめて人〻の心得にもいましめにもなるへきやうに心をふくみ其書きたるものにてまことに人情世態をつくしたるかきさまゝ又文章に於ては古今の名文たることを今更いふに及ばざるものゝ但し此物語を好色の書としていやしめ貶しむる儒者の論どもあれど大意をうまく辨まへぬどもはとるへからす熊澤氏の孝經外傳或問の說をこゝに擧く其說に曰く源氏物語の好色のことは作物語にしていふ其の事は大かた實事あり昔の政の禮と樂との敎をのみかける書は見る人すくなきによりて終には絕失せたる書籍多し好色は人情の好むもの故おもては色このみのことをもつはらに書て內證には昔しの禮樂風俗を後〻まていひ殘すように書きたるものあり色好みともの物語を釣糸にしていにしへの遺風や禮樂のよき事を書きおかれし趣意をもしらずして世間に源氏を讀む人は多くは好色の媒となる事ゝ源氏物語の實事は錦のやうなるものなり世間の源氏を見る人はかの網はかりを見てまことの錦をしらさる故只好色の書の樣にて主意をうしなひて傳はれるは惜きことゝ先神事祭禮の古法葬式の服色の濃き淡きへだてのあることなどくはしくしるしてあり又其時代の頭中將源氏の大將は今の諸侯にくらぶれは中より上の大身なるに彼の頭中將と源氏の君と同道して參內せらるゝとて朝飯に粥と强飯とをまいることあり早朝の參內にて晝ならでは退出せられぬ故粥はかりにては堪がたき故力に强飯をまいると見へたり又源氏の君嵯峨へ行きて日を經たまふときも强飯より外は用ひられさりしさまにかけりこれらのことにても上代の質素にして淸美なる風俗のしらるゝ又後世の糸竹の傳にも絕へたる秘曲とも源氏物語にのみとゝまりてあることもおほしといへり扨此紫式部のむすめ一人あり名を賢子といへり亦和歌をよくして狹衣をあらはすゝ（百人一首一夕話）

● 小說

○薔薇の香

第十四回　（哲人の心）　月の舍　しのぶ

青山さんどうぞとお言ひなさい、サどうぞとサ

何をサ、ちつとも分らないのよ

イ、エあなたの一番好なものがあるのよ、どうぞとお言ならあげますわ

チヤそうれではどうぞ、イヤヨ中川さん早く頂戴よ、ナニ

ナ、ナニですか、チヤうれしひこととレツター（手紙）でよ

そしてあなたの尤も愛する方から……
漸く差出す手紙を引たくるように取つて表てを見
チヤ兄さんからのよ、アヽうれしい中川さん有がたう、本當に今日はうれしひ事ばかりよ、今ならばサウセンド、サンクス(千謝の至り)と申しますよ
ホヲ青山さんが狂氣の様に成つたよ御覧よあのうれしさうなと、私等もあんなに兄弟なかが好いとイヽンですがネー
だつて青山さんの兄さんのように優しくして呉れたら私だつて仲よく仕ますわ、内の兄さんのようなのは本トウにわらしないのよ、常でも顔さへ見ると叱つてばかし居てサそしてネ……困るのよ
アヽ御覧よ青山さんがアヽノうれしさうなと何か幹事さんに願つてるよ
幹事の聲として
エ宜しう御座いますデスが濟んだら直にお降なさいよ長く居つてはありませんよ……ハア宜しう御座います。アコレく走つて行ては成ませんよ。ホンにおもしろい兒だと
衆は手紙を持たまゝ虎の子を得て穴より出るかの如く小走りに趨つて二階の梯子を、トン〱〱(チヨイト青山さん用があるのよ)イヽエ今ちよつと御免よ直き參りますから、ドン〱〱自分の室に入つて障子をピシヤリとうと座つて先づ安心と云ふ面色然かし急に封を開かんともせず先づ上れ書を見てニコリ裏を見てニコリ封じめに爪を少しあてゝ亦たニコリ猫が鼠を弄ぶごとくひつくり反へして更に亦たニコリ漸く堪へられぬと云ふ風附に爲つて爪をさし込みスウツと破つて手紙を取出しバラリと開らひて先づ其長さを見末の方まで眼光をスラリと通して再び初めに反り切鄭寧に讀み出したり、之れよりしてニコリ〱暫らくして眼に涙一滴、此の滴だん〱と廣がつて滿邊なく水を打つ、手にてそつと摩つてまた少し笑らへり斯て逐々と讀み通すうちに溜息初めは全く隱居したるが時々ドツト打つて出てホツト氣焔を吐く顏色少こし青ざめたり眼のうち少こし赤うなつたり兩側の頰に波が寄せ來たれり手が震るひ出し胴が動き顏が重うなつて終に突伏したり。
暫らくして起き直り手紙の半ば比ろをあちこちと捜がして思ふ所を見當り又もや忍び聲にて再應讀みて見る其の辭ばに
此の決心は定めしお前こともも御贊成と存じ候前々より度々

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

信切に申しくれられ特にその學校にて生が波羅氏と既に結約いたしたりなど評判ありたるときお前こと生に成代つて之を辨じくれられ其節もだん／＼との意見まことにうれしく存じ居候然るに生元來の僻として兎角理屈に流れ易く徒らに合性の事など申して反つてお前の忠告をも聞かず人々の笑ひをも顧みず一層此等の反對あるが反つて生の決心を早めて既に其の如く取極めんかとまで存じ居候處前にも申す如く白河氏當今旦夕に迫まれる危篤の病症なるに醫師等も之を何如にとも爲がたく只だ此上は精神上の藥を用ゆるの外なしと申候に付生は平生の友情と同氏を愛する眞正の誠よりして自から此の精神上の醫師と相成たく決心致候そはお前より過日の手紙にも申越されたる如く何如なる因緣にや同氏は特の外不肖の小生を信用あつて行末とも／＼に文學上の事業を爲されたきやの深意も之有しよし承はり候に付同氏只今の危篤には陷られたれど此際病床に於て正當の結約をいたし行末の事など申通じたく候此儀醫師にも相談いたし此迄の情實くはしく話候ところ大に贊成のよし最早之に越へたる良藥はなし切角之にて其心を引立て是非本復したしとの勵みを自身ながらに起さるゝよう相成らんと大層喜びくれ候御承知の如く同氏は元より浮たる性質實はども御座なく小生を信用なし下され候も必竟は行末其の兼ねて望み玉ふ女子敎育の事をとも／＼に盡力せんとの志より起り候とゆへ元來肉についての愛情ならばかゝる危篤の折にこそいよ／＼衰ふるものなれ此樣なる靈の上の御志ありたるとゆへ切度心に喜びて是非本復せんとの勵みを起さるべきやと存じ候左候て此の非常の秀才一人を助け得候はゞ生が盡力恐らく之に超すもの有之まじくと相考へ候よしまた假令ひ不幸にして此等の取扱ひも其効なく到底本復あらざるとも生は友人として既に盡すべき丈の務を盡しまた箇程までに生を信用し下されたる其愛情を謝するの意を通じ得ば生が本望之にて半ばは相違し候ことなりそれゆへ生は合性の上の持論及びホーム(家族)の事に關する平生の意見等につきては遺憾ながら尙ほ前どほりの考へあり白河氏とは到底友人とこそ相成るものなれ決して共に家を作るべき人とは相考へず候へども友情、義愛、等のことを思ふときは右ようの考へは元より注意するに及ばず自から喜んで之を壓さへ心中愉快を感じながら此の決心をいたし候いつも乍ら此世は情慾快樂等の爲に造られたるものにあらず吾等

道の爲に力を盡し馬の如く働らいて終るべきの場所なりと存じ候へば婚姻家族等についての樂しみはよし少々減じ候とも道義を守りたりとの考へ有之候へバ此を償ひて尚ほ十分の愉快これあるべくと樂しみ居候

讀んで此に至りまたもや前に突伏して泣出せり

●寄書

○慈善の婦人

神田西小川町一丁目　司馬こう

歐洲の都會にハ人々處々の慈善の家に聚りて貧人及疾病にて困難する輩を普く尋ね出し或ハ金錢もて或ハ勞力もて身分相應の力を盡して此輩を救助するを第一の務となし皆夫れ〴〵慈善の事に從へり又此組合に加わりたる人ハ主に貴顯紳士や其夫人令孃にて時々已れの閑暇の日にハ此に詣りて衣服を脱ぎ組合毎に申合せたる揃ひの衣を着け顔にハ薄紗樣の布を蔽ひて其何人を知る能はざらしめ今日こそハ其身の常に占むる處の顯位の人あらで一の看護人たり看護婦たるの資格を顯はせりき」爰に墺利亞の首府（ウヰーン）にて或る上等珈琲店にハ常に晩際より紳士などとて人に評判さるゝ輩聚りて四方山の話を爲し各其日の勞を慰むる處ありき或る日の事にやありけん平常の通り各人聚りて彼方の卓此方の椅子に座を占め思ひ思ひの戯を爲し樂しみ居りける時組合の一婦人入り來りき其誰なるやハ前にも謂つる如く組合の衣を着けてありければ確と見認難けれども其歩行の寛徐と其動作の靜婉とを思ひ併すれは上等敎育を受けつる婦人にて勿論中以上の者なりとハ誰か僻見にも見へにけり」婦人ハ彼方の偏偶なる圓卓を取り圍み何事をや爲してありける四五人一座の一人の傍に寄りその頸に懸けたる喜捨嚢を鳴らし聖書中の金言を唱へ喜捨あれかしと祈りける慈悲ある人なれは早速諾ふ筈なるに如何なる心の妖魅かありつらん一向見す聞かぬ樣を爲し居たり婦人ハ再ひ其隣座の人に至り又其次席の人に對ひ請ひけるも皆一向不省の風樣爲して居たりしに末席の人は口を尖らし吠へるか如き聲を出し（我等ハ今大切の事を爲し居るぞ）と言語剛猛しく云ひ放てり成程大切の事と云はゝ云へ此人にハ（カルタ）の輸ち贏けに心を奪はれ一心不亂にあそびし樣子ありければ婦人も心差扣へ傍にて天神を祈禱り暫らく時を遷しけり暫くありて戯も終みたる樣子にて彼の末席の人のみハ一言にだも云つれば便ぞあるらんと再ひ其人に向ひ嚢を鳴らし已れの救助せんとする病患者の姓名を告げ喜捨を乞ひしに其人ハ今の贏

けに心不快なりければ何事やらむと云ひし儘婦人の方を顧向きながら（五月蝿人かな此にても與ふべし）とて拳をもて其頬面を痛く打ちたりけり」其時婦人の心如何でやありけん今でこそ喜捨を聚むる婦人なるも平常ハ某の夫人とか某の令嬢とか尊め噂さるゝ者なれは如何に纖弱婦女の身とハ云へ餘り無禮無道な事なりとて怒りの心凜然して面に見ハる樣子なりしが否や否や待てよ是怒りと胸に手を當て巳が心と心を抑へいと纖婉に彼の侮りたる人の顏を見つめながら特に温順しく（今のは妾への賜物ならめ我等の愛する病患者にも偏に何ぞ與へ給はれよ）と云ひければ彼人手に持ちたる（カルタ）を棄て倚子を遠れて婦人の足下に轉びその罪を謝ひつゝ巳が所持の金圓を悉く出して彼の貧しき病人の苦痛を慰むる萬分に加へ給はれかしとて云ひ放ち顏も得仰けす逃るが如く狐鼠狐鼠と走り歸ぬ」此座中に聚り居たる人には皆此婦人の德に感じて各喜捨を出したりしが何れも富貴のものゝみなりければ思ひの外なる多額となり婦人ハ厚く禮を述べながら兩の眼に涙を流しつゝ徐に其室を去りたりける然し此涙ハ先程の侮辱の爲めの悔し涙にはあらで反つて今聚りたる丈けの金あれば病苦に罹る貧人を慰むるに十分餘りあれは人々巳れに此多額の喜捨を與へ巳をして貧者を慰むるの愉快を受けしむるを喜びての喜び涙にてぞありける

●文苑

鈴木弘恭大人　撰

初雁　　齋藤佳年子
今よひかる宿ハいづこかしら雲にはねうちかはしわたる初雁

同　　土屋みね子
昨日までやどをいづこにかりかねのけふハ都に鳴てきにけり

同　　楠　正城
いねもせずまちしかひあり小夜ふけて忍びにわたる初雁の聲

野草花　　古字田淑子
秋の野に咲そめにけるや小草ハ誰がおりいでしにしき成らむ

萩上露　　三宅くす子
萩の花さき亂れたるこすゑにハ露さへいかにこゝろおくらむ

水邊月　　齋藤佳年子
池水にうつれる月のきよけれハ瀬にすむ魚のかげもみえけり

同　　市川てふ子
いさら河なかるゝ水ハはやけれど移れるつきの影のとけさ

同　　佐々木綱子
筏士のさをさし下す水の上にくだけてながるゝつきのかけかな

同　　大生　靜子
くまもなく照らせる月の影さしてながるゝ水ハ音もさやけし

同　　鈴木と代子
玉川の水にうつれる月かげもはぎの下づくにくだけつるかな

同　　古字田淑子
さやかにみかける浪の玉川になかれてふくる秋のよのつき

同　　廣瀬春惠子
水の面ハ濁りなからににごらぬハうつれる月の影にぞ有ける

同　　太田きん子
隅田川水かげきよくてる月にいへ路わするゝあきの夜ハかな

水邊月の詞　　朝山とよ子
をりしも秋の最中なれば夕ぐれのほどより友とちあひかたらひて隅田川に月見んとて小舟にさをさせぬ川風は身にしむものからまたなきけしきになん我とおなじ心のみやびをにやこぎのぼすかちのおとの友よぶ都鳥のこゑとゝもにはるかにきこゆるもさすがにあはれなりやがて吾妻橋をもうちすぎてみめぐりのわたりに舟をとゞめて見はたせハ空ハいとよう晴てちりばかりの雲もなきに望の夜の月く

まなくてりわたれバ空や水みつやそらかとうたかふばかりなるさゝ波にきらめくかげハさながらこかねの龍のわだかまるにことならずいでやとてかねてたづさへしわりご〇などたうべてたがひにゝゝゝをめくらすほどに人々うち興じおのがこゝろ／＼にうたふもありやまとからうたものするもありて實に月の都にあそぶもかくやとおもふばかりなり

　終夜かくてあかさん此の川の名もすみわたる月をめでつゝ

などかいつくるほどに月ハまつち山のかたに傾かんとするにおどろきて舟子どもにおほせてかぢをめぐらしつ

●新報

〇淑女以文會　森富子外十一の婦人方此度び題號の如き會を發起せられ來る二十九日初會を開かるゝよし會員を正員賛成員名譽會員の三つに分ち會塲は當分神田猿樂町の尙絅學校と定め毎週土曜日に會して土佐日記ボリユー氏の婦人教育論通俗幾何學等の講述をきくと云ふ

〇婦人矯風會　同會は來月三日木挽町厚生館に於て大演說會を開かるべき計畫あり

〇箕作佳吉氏　理科大學教授從六位箕作佳吉氏ハ去る十四日東京高等女學校長に兼任し奏任官三等に叙せられたり

〇產婆學校　今般有志者の企にて麴町區三番町六十六番地に產婆學校を設立し專ら內務省の試驗を受けんとするものゝ爲め必要の學科を教授する目的にて婦人科其他產婆に必要なる諸機械等を豫備し去る十五日開校式を執行したり

〇大坂婦人慈善會　大坂鎭臺偕行社に於て兼て將校以上の婦人が設立したる婦人慈善會にてハ今度幹事長以下幹事に至る迄の撰舉會を開きしに幹事長ハ高島中將の夫人春子、幹事ハ牧野新子、山根米子、堀內雪枝子、中村勝子、河上梅子、田島治子、伊瀬知德子、守永房子、小島鈴子、野邊佐目子、西川常子、篠原幾佐子、藤井貞子、三原八重子、小松玉子、前田禮子、小川順子、芝富子、萩原浦子、武田花衛子、草場嘉子、佐藤仲子の廿二名と外に員外補助として古田德一、大村屯の二氏が當撰したり

〇大津婦人慈善會　滋賀縣大津の僧侶中有志家を以てしられたる百石町の出口義門氏が發起となり大津婦人慈善會と云ふを組織し義捐品を集めて細民を救助せんとの計畫にて此程規則等も定まり夫々誘導に奔走中なりしが已に中井同縣知事の夫人を初め其他賛成者意外に增加したれば愈々中井知事の夫人を會長に高橋大津分營聯隊長、園田同縣書記官の兩夫人を副會長に推撰し來月六日同地顯照寺に於て其第一會を開くと云ふ

〇樂器の寄贈　米國ミシガン洲なるプレマス教會の某婦人より曾て新潟縣有志の設立せし新潟女學校及び北越學館創立の趣旨を大に賛成し精巧なる樂器を寄附せしが此程漸く到着したる由

〇金澤婦人慈善會　石川縣金澤にてハ過日金澤婦人慈善會と云ふを開きたるが同會は陸軍高等官の婦人相會し慈善博愛の道を講し兼て軍人の婦たる女德を治め智識品位を增進するを以て目的とし尙ほ衣服裝飾等ハ極めて質素を守り固く奢侈の風を戒め協力友愛を旨とする由又同會ハ朝野を問はず其主義目的を賛成するものハ誰人にても入會を許すと云ふ

〇橫濱婦人交際會　同港の有志者渡邊こう、齋藤とめ、小宮ひで、星野りつ其他諸子の發起に係る橫濱婦人交際會ハ意外に賛成者多く已に入會せし者四十餘名に至りしかバ去る十五日を以て其第一會を橫濱倶樂部に於て開きしが以來ハ毎月一回づゝ開會する筈なりと云ふ

〇谷子爵の婦人論　高知に在る谷將軍が此頃或る席上にて演べられし談話中婦人に關したる一話あり今其一部を抄記せんに「目下我國に於て慮らざる可からざるハ養蠶の事にて今米國に就て養蠶の情況を語らんに米國の風俗ハ概するに歐洲諸國とハ異にして其婦人の衣服にハ絹布を用ふる多く中等以上の婦人に在つてハ多くハ皆な絹を着たり斯の如くなるを以て從つて其供給多からざるを得ざるも從來ハ自國にて製造せず皆な外國より輸入し來りしが近時輸入品を減少するの政略を行ふに至りてより偏に養蠶の事業を盛んにし兼て婦人の品行を紊さゞらしめんが爲め婦人養蠶會社なる者を設立し頻りに勵勉せり然れども現今の勢にてハ今より二三十年の間にハ迚も日支より輸入するの絹布を防ぐにハ至らざる可し是れ畢竟猶ほ初步にして未だ熟練せず且我國にてハ女工一人に給するに五錢十錢の賃金を以てせば足れりと雖ども米國に在つてハ工人の手間賃高く三十錢乃至一圓を給するに非らずんば之に從事せしむる能はざるなりされば此一事を以て之を輕忽に見るべからざる一の恐るべきものあり其恐るべきものハ則ち米人ハ概して忍耐强きのみならず殊に婦女子の愛國心に富み且つ歐洲諸國とハ異にして婦人中に學者多く或ハ社會改良等に意を注く者亦少なからざる事是れなり之に反して我國の如きハ概して婦人に毫も愛國の精神なく只管男子の揮下に從て其手足を動かすのみ斯の如きハ我國有志者に在て大に注意せざるべからざる處とす此故に我をして彼に劣らざらしめんとを欲せば則ち婦女を奬勵して盛んに生糸を製造し以て他に輸出する事を勉むべきなり」云々

●海外女事

〇愛蘭の女權　アイルランドの人權微々たりと云ふか然れども此頃の西報によれば同國ベルフハスト府內の女戶主は府會議員を撰舉する投票の權を與へらるゝことゝなれり元來イングランドに於ては十八年前來すでに其許ありスコツトランドに於ては四年前來亦た此許ありたるが彼の愛蘭も亦た之より同樣の地位と相成るに至りたり

〇米國婦人禁酒會々塲　米國の婦人禁酒會は此頃ろシカゴに本部の會塲を設立せんことを企て一萬弗の資本を募り之を一株百弗の株に分ちて廣く集ると云ふ而して此會塲は禁酒主義の學校講院等にも使用し尙ほ事務所をも設け置かんとの計畫のよしなり

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

穎才新誌 十部前金十八錢 記事不日進改良 見本進呈

物理問答三百題 全 定價金二十錢 紙數百八十頁

東京神田區美土代町三丁目四番地 穎才新誌社

婦人洋服裁縫教授廣告

御望の御方は至急御申込有之度候但し束脩一圓、月謝七十五錢○大人小兒の洋服仕立の依賴に應ず、大人仕立料一圓五十錢以上、小兒同五十錢以上

神田今川小路一丁目一番地 石橋

染法無謝儀通信教授廣告

但シ郵券八錢ヲ送ラバ絹木綿麻毛各色ノ本法染上ゲ見本並ニ詳細ノ諸規則書等ヲ回送ス可シ

栃木縣下野國寒川郡寒川 土耳其法 染工舘

婚姻論 朝野新聞記者 横山雅男君著 ○定價一冊三十五錢郵便税十四錢

○統計局次長世良太一君序○統計協會議員吳文聰君序

右は横山君が得意の統計學上より婚姻の定義其外早婚晩婚雑婚離婚などすべて婚姻に關係する事物は擧げて殘す所なく議論の確實なる擧例の精密なる世の父母たるもの亦た青年の男女の方々必讀の書なり

東京々橋區日吉町八番地 女學雜誌社

明治女學校塾生心得書(第三)(前號第三節第二條に續く)

但し其父兄親戚の許に行くものにして同行者を伴ひ難き節は一人にて外出するを得ると雖も歸校の際必ず證人の印を押したる證書を持參すべし

右證人證書の雛形

、、、、、、、、、、、、、、何々迄今日何時より何時迄(若し一泊せし時は)昨日何時より今日何時迄拙者方若くは同人の父、兄、親戚某方に參り居り且つ昨夜一泊いたし候に付此段御屆申上候

月 日

第三條 外出するものは其の運動時間なると休日に於けるとを問はず總て出口の札を反へし栞を出し置くを要す

第四條 土曜日の夜若くは大祭祝日の前夜は府下に父兄親戚ある所の塾生に限り其の家に泊まることを許す然れども二回の休日を引續きて外泊するを許さず

第五條 日曜日は休日なるを以て外出を許すと論なしと雖も二回引續て全日曜日外出するを許さず是れ日曜日には特に塾生の爲に宗教の講談會を開くとあるが故なり

第六條 門限に後るゝものは其理由を質して證人の證書を要するとあるべく又外出するものは歸校の際必ず證人の證書(其書雛形前にあり)を持參すべし

第七條 塾生にして修業の爲め時日を定めて外出を乞ふものは能く其事由を質して特許を受るとを得べし但し右特許に定めたる時限に後れて歸校するものは總て門限に後るゝものと同樣なるべし

第四節 種々の心得の事

第一條 塾生は平日自ら物品を買入るゝを得ず一々取締に乞ふて之を校婢に托すべし故に休日外出の時成べく其必要の品を買調ふを要す

第二條 塾內に風呂場を設け置くに付き兼て其場に張出したる心得書及預め定め置きたる順番に隨ひ靜に入浴すべし

第三條 塾生はランプを持參するを禁じ又客室に備へ置ける非常用の蠟燭を妄りに使用するを許さず安眠時間に必ず寢床に入て眠るを要す

第四條 食事の際は一人立て感謝祈禱を捧たる後に非ざれば食物を取るべからず

第五條 塾生は必ず應接室に於て來客に面すべし但し事宜により書籍室に於て之を辨じ得ると雖も必ず取締の許を得るを要す

第六條 學校に來客ありて塾生若し其前後を通るときは靜に立禮して過ぐべく又來客の案內を乞ふとき若し居合せば躬ら直ちに取次ぎて之を校婢又は取締に報ずべし此外總て風儀容姿を鄭重にして苟且にも輕々しき行ひ又は不親切の樣躰などあるべからず

第七條 塾生より郵送する手紙及び其の受取るべき郵書はすべて一應取締の手を經るを要す尚ほ洋風無名の書狀を受取たる節は開封の後先方の人名を取締に報ずるを要す

第八條 一室內の塾生は室長の保護を受け室長及び諸塾生は取締補(二階の塾室內に寄寓す)の保護を受くべし又十二歲以下の小女は兼て一人に付一人の保護生を定め置くに付右保護生へ萬事親切に其小女を介抱すべし

第五節 非常の折の事

第一條 鐘をつゞけ打に烈しく鳴らす時は何か非常の事あるものと承知し其儘直ちに二階より下りて先づ講堂に集るべし

第二條 鐘を烈しく鳴らすと同時に下より大聲にて下るまじきよう注意するときは決して二階を下らず其儘直ちに非常梯子より下り一と先づ九段坂下公園內に行て集會し幹事取締の至るを待つべし

第三條 右非常の節は室長は室內の塾生を保護し何事にも最後に留つて之を介抱すべし又た十二才以下の小女は受持の塾生必らず之に同伴して進退するを要す

第四條 右非常の節は取締補室長に指圖して萬事手落なきように取計ふべく殊に其二階非常梯子より下るべき際は能く非常出來事の場所を認めて窓の鐵棒に綱梯子を下し大年の塾生を之より下すよう相計ふべし

(未完)

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

○稟告

弊店儀豫て洋服店開業の計畫仕曩に英佛國へ手代派出させ親しく彼地の服裝を見聞し現時流行の男女服地其他附屬品等種々仕入仕候處追々着荷尚又倫敦巴里に於て熟練なる裁縫師をも傭入既に來着仕候然るに未だ洋服店建築中に候所御得意樣方々陸續御用被仰付折角の御厚意に悖り候ては甚だ遺憾に御座候間當分の內呉服店に於て業務相營み御注文に應じ度何卒多少に係はらず御用向被仰付度此段偏に奉冀上候也

駿河町
ゑちごや
三越得右衞門

發兌
九月。三日 十日 十七日 廿四日
十月。一日 八日 十五日 廿二日 廿九日
十一月。五日 十二日 十九日 廿六日
十二月。三日 十日 十七日 廿四日 三十一日

定價
一册。五錢 郵稅。一錢（但府內無郵稅）
十册。四十八錢郵稅。十錢（同前）
半年分 一圓十七錢 府外は 一圓四十三錢
一年分 二圓卅四錢 府外は 二圓八十六錢

廣告
特別廣告は婦女に關する協會會合等の記錄を揭ぐるものにて一切無料とす但し紙面半頁分の廣告を掲する每に右雜誌十部の注文を要し以上半頁分每に十部增の割合と定む
一行 一回（廿七字詰）前金拾錢
同 三回以上 一割引
同 六回以上 二割引
十行以上一割引。二十行以上二割引。四十行以上三割引。但し不道德なる事物の廣告は謝絶す有益なる事物の廣告は社議の上無代價にて引受く女學關係の書籍は一部の寄送を乞ひ相當の廣告をなし且つ本誌に批評すべし

WOMAN'S MAGAZINE.

"JOGAKU ZASSHI."

Price 5 *sen*. By post *yen* 1.43 six months, *yen* 2.86 per annum, in advance.
Edited and published by Y. H. Iwamoto, at The Jogaku Zasshi Office, No. 8B HIYOSHICHŌ, SHINBASHI, Tôkyô, Japan.

女學雜誌賣捌所

東京神田區淡路町巖々堂○東京芝西久保櫻川町萬春堂○東京神田區雉子町鬪々社支店○同神田區佐柄木町東海堂○同日本橋區新段町良明堂○同京橋區木挽町壹丁目萬字堂○同本鄕區元富士町盛春堂○同本鄕區春木町二丁目解明堂○東京本鄕四丁目文壽堂○橫濱住吉町角田屋貞○京都四條通小橋へ入澤集光堂○同三條通東洞院西へ入クリスチアンボード○大坂備後町四丁目岡島支店○仙臺國分町十五番地伊勢安雜誌部○宮城縣仙臺大町木村文助○尾張國名古屋本町石版舍○出雲國松江新町盛進堂○廣島縣大手町一丁目早速社○長崎酒屋町虎與號○江州彥根西內大工町新々堂○相州小田原綠町石壽堂○上州高崎田町煥平堂○勢州松坂家里初枝

發行所
東京京橋區日吉町八番地
本局 女學雜誌社
持主兼編輯 巖本善治
印刷 森田豊